

第7回世界のウチナーンチュ大会が開かれる 海外 20ヶ国 1地域から 2,345 人がふるさとへ

第7回世界のウチナーンチュ大会が10月30日の前夜祭(国際通りパレード)を皮切りに、10月31日から11月3日まで那覇市を中心に開催された。

大会は1990年から始まり今まで5年に1度開かれてきた。昨年が開催年だったがコロナの影響で1年延期となり、今年2022年6年振りに開かれ、海外20ヶ国1地域の2,345人を含め、計8,521人が参加した。

ぼくは兵庫県人会のご厚意でパレードに加えさせていただいた。



兵庫県人会のみなさんと。ヤマトンチュは出しゃばらず、後方に

7回まで以下のような日程、テーマなどで大会が開催されてきた。

回数	知事	開催日	テーマ	海外	日本	合計
1回	西銘	1990年8月23~26日	沖縄・人—その広がり求めて	2,397人	986人	3,383人
2回	大田	1995年11月16~19日	海を越え、言葉を超えて	3,409人	513人	3,922人
3回	稲嶺	2001年11月1~4日	未来—ちゅら夢心にのせて	4,025人	300人	4,325人
4回	稲嶺	2006年10月12~15日	ひろがるチムグル つなげるチムチュラサ	4,393人	544人	4,937人
5回	仲井真	2011年10月13~16日	ちゅら島の 魂響け 未来まで	5,317人	2,046人	7,363人
6回	翁長	2016年10月26~30日	ウチナーの躍動・感動 世界へ響け	7,353人	603人	7,956人
7回	デニー	22年10月31~11月3日	うちなーのシンカ、今こそ結ぶ世界の輪	2,345人	6,176人	8,521人

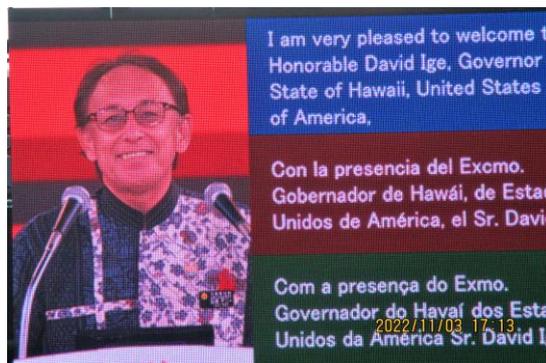


グランドフィナーレ

10月30日の前夜祭は雨は降らなかったが、開会当日の10月31日は豪雨に近い大雨となり、開会式も室内に変更され式典も短縮されたので、やや盛り上がり欠けた。しかし11月3日の閉会式とグランドフィナーレは天気も晴れ、屋外の沖縄セルラースタジアム那覇に7,699人が集まり、

一気にヒートアップ、会場は興奮と熱気に包まれた。

閉会式の挨拶で玉城デニー知事は「私たちはウチナーネットワークという強い絆で結ばれた家族(ヤーニンジュ)だ。ユイマール(助け合い)、ヒヤミカチ(困難に打ち勝つ精神)、肝心(チムグクル)、命どう宝といった沖縄の心を次世代につなごう。ウチナーシンカ(仲間)が、平和と笑顔でおこなわれたウチナーンチュ大会を誇りに、世界中から戦争の恐怖を一日も早く取り除くことができるよう、対話と共存を求めている」と呼びかけた。



玉城デニー知事の閉会挨拶

それに引き換え、岡田直樹・沖縄担当相は「沖縄経済は着実に成長し、わが国全体の経済成長をけん引する役割も期待されている」と、無内容な歯の浮くような挨拶をする一方、米軍基地の下で犠牲を沖縄に押し付けている事実について、「米軍」の「べ」一言も、「基地」の「き」一言も語らなかった。そこで、ぼくは観客席から「沖縄に米軍基地を押し付けるナ！」と大声で叫んだのだった。



グアムのパレード

それでは、世界のウチナーンチュ大会を催す目的は何か。その目的を第1回大会実行委員会は次のように述べている。

『世界のウチナーンチュネットワーク』の構築

世界に雄飛し、活躍しているウチナーンチュ(沖縄県系人)は沖縄の貴重な人的財産である。これらの財産を経済、文化、技術等の各分野において、本県をかなめとして結び付け、有機的に機能させるためのネットワークを確立することが本大会開催の目的である。



ザンビアのパレード

この趣旨に沿ってであろう、それぞれ以下の事業がスタートした。

第1回：ウチナー民間大使を設立

第2回：世界の県系の経営者らでつくる WUB（ワールドワイド・ウチナーンチュ・ビジネス・アソシエーション）ネットワークが設立された

第3回：ジュニアスタディツアーが始まる

第4回：ホストファミリーバンク制度が発足

第5回：世界若者ウチナーンチュ連合会（WYUA）が発足

翌年 2012 年にブラジルで第1回世界若者ウチナーンチュ大会が開催された。

第6回：10月30日を「世界のウチナーンチュの日」と制定する

プレ企画として第5回世界若者ウチナーンチュ大会が初めて沖縄で開催された。

かくして大盛況のうちに第7回大会は無事に終了し、次回は5年後の2027年に開かれる予定である。

7回までの実績を積んできて、世界中の県系人が日常的に交流できる館、本家（むーとうやー）・世界ウチナーンチュセンターを創設しようとの取り組みが進んでいる。石川友紀・琉球大学名誉教授（移民史研究）は「ルーツの存在する沖縄県に海外の会館に匹敵する拠点としての本家の総合的な会館がまだまだ建設されていないことは、海外の県系人に申し訳ない気持ちでいっぱいだ」と述べている。とても大切な事業で、実現されることを心から期待したい。

このような動きもとらえてであろう、伊佐眞一は



ブラジルのパレード



ペルーのパレード

世界ぬ ウチナーンチュよー、Unite！

（『^{ゆーがわ}「世替い」とウチナーンチュぬ^{さに}実』『N27 no.10』所収）との関の声を上げるのだ。

ここで、世界のウチナーンチュ大会にかかわる三つの投稿を紹介しよう。

一つ目：『ウチナーンチュで良かった』池原節子（74歳）

第7回世界のウチナーンチュ大会が大きな混乱もなく無事に終わったのは、海外の方々と沖縄の関係者の協力の結果だと思えます。

ペルーなど南米、北米の3世、4世になると、髪の色や肌の色は少しずつ異なってきましたが、その根っこには沖縄にルーツを持ち強い絆で結ばれているウチナーンチュが世界中にいると思うと、沖縄に生まれて本当に良かったと思えます。

1世、2世の方々の海外での苦労は、言葉では表現できない人生だったと想像します。

そんな苦しい日々の中でもウチナーンチュとして子や孫に方言を教え、三線、琉舞を習わせたりと故郷の歴史や文化を伝え、誇りを持って生きてきたことを感じました。

戦後生まれの私は内地に憧れた時期もあり、ヤマトンチュになりたかった自分を反省。三線や琉舞はできないが、沖縄民謡をラジオやYouTubeで聴きながら家事をしています。(那覇市)

『沖縄タイムス』2022年11月28日付「読者欄」

二つ目：喜屋武幸容『「復帰」50年は決意を新たにする元年！』

2022年、世界のウチナーンチュ大会が開催される。コロナ禍を乗り越えた多くのうちなんちゅ達が里帰りに来てくれる。祖国琉球に住む私たちが、母なる言葉を忘れ、かつて万国津梁の精神でアジアの国々と友好をもって大交易時代を築き繁栄した国であったことを忘れ、ムチは嫌だからせめて飴でもしゃぶって生き延びようという腐った根性のままでいるならば、いつの日かこの島々の人間が琉球人学生としてブラジルやペルー、ボリビア、そして、アルゼンチンなどへ、自らのルーツを学び直すために南米まで出かけなければならない日が来るであろう。



国際通りは鈴なりの歓迎一色

(『N27 no.10』所収)

三つ目：沖縄タイムス社会部・島袋晋作記者『しまくとうば「消滅の危機」』

第7回世界のウチナーンチュ大会。期間中、県内各地ではしまくとうばが飛び交い、世代を超えてつながる絆の強さを肌で感じた。

アルゼンチンから来た宜野湾市出身の石川勉さん(75)とのユンタク(おしゃべり)が印象に残っている。

いつも通り日本語で話しかけたら、きょとんとされた。言葉が通じないと思いきや、石川さんは「ワンナー（僕は）…」と話し出した。小学生の頃、両親とアルゼンチンに渡ったが、普段から家で使っていたしまくとうばは今でも体が覚えているようだ。こちらは流ちょうなしまくとうばに、意味を理解するのがやっと。うまく会話ができず、ウチアタイ（恥ずかしい気持ちで反省）した。（中略）

民謡や舞踊など固有の文化を彩り、一時は強制的に奪われたしまくとうば。遠く離れた南米でも息づいていると思えば、守っていかなければと強く思う。まずは普段から使うよう意識したい。

『沖縄タイムス』2022年12月11日付「記者の眼」欄

ここで書いている内容は喜屋武幸容と共通していると言えよう。

辺野古でのひろゆき氏の蠢動を考える

ぼくが辺野古の座り込みに参加したのは10月25日からだったので、シュワブ前での話題は10月23日の那覇市長選の結果とインターネット掲示板「2チャンネル」創設者のひろゆき氏（西村博之、以下敬称略）の言動についてがその多くを占めていた。

以下にひろゆきの言動を見ることにしよう。次のようなものだ。



キャンプ・シュワブゲート前

① 10月3日夕方、抗議の市民が解散した後のキャンプ・シュワブ前のテントを訪問。座り込みが3,011日に達したことを示す掲示板を前に笑顔で写真を撮影し、「座り込み抗議が誰も居なかったので、0日にした方がよくない？」などと投稿した。
⇒ 市民がいない時間帯があるから、3,011日の表記は事実ではないとでも言いたいのだろうか。

② 10月4日、キャンプ・シュワブ前を再び訪れ、座り込んで抗議している市民が機動隊員に排除されるのを離れた場所から見て、笑いながら「あ、すごいがんばっている」と声を上げていた。

⇒ 自分は排除される恐れもない遠い所から眺めている。

⇒ 10月5日、玉城デニー知事は「現場で3,000日余り抗議を続けてきた多くの方々に対する敬意は感じられない。残念だ」と語る。

③ 10月6日、ひろゆきは「2022年の名護市長選では、基地容認派の市長が勝っているのをご存知ないのですか？」「もう少し、勉強された方がよろしいかと

思います。それとも名護市民の民意は踏みにじっても良いのですか？」と投稿した。

⇒ 当選した渡具知市長は辺野古新基地建設に賛否を明言せず「見守る」立場なので、投稿内容は誤り。

④ 10月7日、座り込みの日数を記録した掲示板について「誰かが書いた汚い文字」と揶揄する。

⇒ 掲示板は辺野古の住民・金城武政さんの作である。彼は母を米兵に殺害された。本土（ヤマトウ）の基地押し付けに人生を翻弄され、それでも現場で反対の声を上げ続けている。だから、掲示板には多くの人びとの思いが込められているのだ。「普通は（ひろゆきのような）心情にならないと思うんだけど…」
「この日数は、基地押し付けと抵抗がこれだけ続いていることを示している。本土の人が見れば、放置してきた恥ずかしさが出てくるはずだと思う」と。



新しい掲示板の「不屈」部分に筆入れする島袋文子さん(右)。左は金城武政さん(『沖縄タイムス』)

「汚い文字と言うなら、もっときれいに作り直してもいい」と、金城さんは反戦の意味を込め、ウクライナ国旗をイメージした色を使い、実際に新しい掲示板を作った。島袋文子さん(93歳)も掲示板の「不屈」の文字に筆入れをおこなった。文子さんは「字が汚くてもきれいでも、大事なのは私たちの思い。それを見下すような発言は許せない」と語った。そして「沖縄戦では死体が浮いて血が混ざった泥水を飲んだこともある。面白半分で行っているのではなく、戦争は絶対に繰り返してはならない

と知っているから体を張って続けている。彼には胸に手を当てて沖縄のことをもう一度考えてみてほしい」と呼びかけた。金城さんも「もう一度彼が来たら、なぜ私たちが反対しているのか、彼が何を考えているのか、腹を割って話してみたい。こちらからは批判しようとは思わない」と語った。

⑤ 同日7日、「沖縄の人って文法通りしゃべれない」「きれいな日本語にならない人の方が多い」と発言。

⇒ 1879年の琉球併合後、時の明治政府は琉球語を奪い、ヤマトウ言葉を強制



金城武政さんにインタビューする女子大学生

した歴史を知らないのだろうか。きれいな日本語とは何を指すのか。NHKのアナウンサーが話す言葉のことか？言語に優劣はないだろうに。

こうしたひろゆきの蠢動に対して、キャンプ・シュワブ前では今までにない全く新しい事態が起こった。実際、事実はどう

なのかを自分の目で確かめようと大学生や青年たちが、ぼくが座り込んでいた連日訪れて来た。会社を退職し退職金が入ったので愛知からやって来たという青年、野宿が趣味なので那覇から何日もかかってやっと着いたという埼玉の青年、数時間かけて金城武政さんにインタビューする東京の女子大学生などなど。

いつもは高齢者が多い座り込み現場だが、彼らが居るだけで景色もパツとはなやかなものになった。故事ことわざで“百聞は一見に如かず”と言うが、“百のヘイトは一の対面に如かず”をぼくはこの時、心の底から実感した。今回座り込むことが目的ではなかっただろうが、今後彼らの中から座り込みに参加してくれる若者が必ずや登場するだろう。

ぼくは琉球人遺骨返還請求訴訟を関西（京都地裁→大阪高裁）で支援しているが、現場で原告の亀谷正子さんとお会いした。そのほかにも屋良朝博・前衆議院議員、ダグラス・ラミスさん、山城博治さん、高里鈴代さんなどなども。



新しくつくられた掲示板。3,033日

吉川秀樹さん（Okinawa Environmental Justice Project 代表）とも会った。彼は、座り込み現場で次のように報告した。

アメリカ上院・下院の軍事委員会に所属する議員 32 人に辺野古新基地建設の中止と普天間飛行場の閉鎖を求める書簡を 9 月に送った。書簡では辺野古の軟弱地盤やジュゴンの現状などを説明している。また沖縄防衛局が申請した設計変更を県が「不承認」とした理由や普天間飛行場の騒音、有機フッ素化合物（PFAS）の問題も取り上げている。

上院・下院の軍事委員会には約 70 人が所属しているが、その中で環境問題に取り組んでいる議員 32 人を対象にした。賛同している海外の市民団体には、全米に 438 の支部を持つ民主主義的社会主義者（DSA）や約 70 万人のアジア太平洋系米国人労働者連合（APALA）などがある。



第 4 ゲート前

このように発言した彼は、軟弱地盤の問題が十分アメリカの議員たちに届いているのかと言え、はなはだ不十分と言わざるを得ない。日本政府も不利な点は伝えていないと思われるので、我々市民の側からのアプローチがとても重要だと強調した。

ところで、司会者が吉川さんの父親は「芭蕉布」を作詞した吉川安一さんだと紹介した。それを聞いてびっくりした。「芭蕉布」といえば、吉川安一作詞、^{ふくはらつねお}普久原恒勇作曲

になる 1965 年に発表された沖縄歌謡で、つとに有名な歌だ。

芭蕉布

一 海の青さに 空の青
南の風に 緑葉の
芭蕉は情けに 手を招く
常夏の国 わした島沖繩

二 首里の古城の 石畳
昔を偲ぶ かたほとり
実れる芭蕉 熟れていた
緑葉の下 わした島沖繩

三 今は昔の ^{すいてんじきなし}首里天加那志
唐ヲウーつむぎ 機を織り
上納捧げた 芭蕉布
^{あさじくんじ}浅地紺地の わした島沖繩

ところが、作曲した普久原恒勇さんが、ぼくが沖縄滞在中の11月1日、89歳で亡くなった。戦後沖縄を代表する作曲家で、2000年に沖縄タイムス賞を受賞、2013年に県功労者となった方だ。

写真にあるように、コロナがやや下火に



機動隊のごぼう抜きが再開

なるや、容赦ない機動隊のごぼう抜きが再開された。また、台風の接近が予想され、防衛局の工事も中断されたので、抗議船も途中で陸に上がったが、久しぶりに海から見る護岸の風景の写真である。



海上から護岸を見る



国立劇場おきなわ

『喜劇 トートーメー万歳』を鑑賞する

辺野古での座り込みを終えて、世界のウチナーンチュ大会に参加する前に、国立劇場おきなわで公演される『喜劇 トートーメー万歳』を鑑賞した。ヤマトゥに居る時からチケットを予約していた。芝居は全編ウチナー口

で演じられた。字幕スーパーでヤマトウロに翻訳されるのだが、省略されている部分もあり、観客が笑うシーンも、ぼくにはどうして笑っているのかが分からなくて残念至極だった。

後日、大城立裕全集の戯曲編に収録されている原作を読んだ。ここには「琉球方言で翻訳上演されるべき台本」との注が付されており、ヤマトウロで書かれてあるので理解できた。

『沖縄大百科事典 中』P914)に「トートーメー継承訴訟」の項目があり、次のような説明がある。

祭祀継承者をめぐる訴訟。申立人は那覇市若狭に住む女性（55歳）。同市牧志にある墓（墓地）が市の公園指定地となり、墓地移転にともなって、祭祀相続の争いが親戚間で生じた。そのさい、一族の男系親戚が沖縄の慣習に基づいた祭祀相続を主張したため、直接の娘にあたる同女性は納得せず、1980年3月、那覇家裁に提訴した。81年3月、同裁判所はトートーメー継承の慣習は、男女の平等を規定した憲法及びその他の法令に違反する。申立理由は、一件の資料で是認し得るもので、申立人を祭祀継承者にするのが相当との審判を下した。同訴訟は、トートーメーの継承は女性でもできるか否かの論議が背景にあり、裁判所の法律的な判断が注目されていた。

この作品が初演されたのが1989年、那覇家裁で審判が下ったのは1980年であるにもかかわらず、沖縄の社会ではまだまだトートーメーをめぐる問題が継続しているのであろうか。それ以上のことはヤマトンチュのぼくには分からない。



那覇駅の構内

県立図書館にも行った。図書館を出て旭橋駅近くに、那覇市歴史博物館提供の「那覇駅の構内」と「那覇駅停車中の機関車と客車」の掲示板があった。今まで知らないことだった。沖縄軽便鉄道の時代だ。



『喜劇 トートーメー万歳』案内チラシ